

レグルスの剣

天空の星々が、現在いまとはまるで異なる位置に輝いていたほどの、遠い昔。

月が、未だその輝きを失わず、この世界の夜を明るく照らしていた頃のこと。

古よりこの宇宙に存在し、智によりこの世界を治めていた十二の種族が、平和を願い、互いに力を合わせ、千年の時をかけて築き上げたという魔法都市があった。

その名をキャロルシードという。

この物語は、その魔法都市より山ふたつほど隔てたところにある神秘の樹海、白き聖獣フアーナの森からはじまる。

第一章 フェアイルスの少女

一陣の風に、木漏れ日^{こも}がゆらめいた。

木々の間を吹き抜ける風が運んでくるのは、新緑の季節を迎えた初夏の森特有の、あの香りである。

フェアイルスの少女、ミアネージュ・リルフィ・ル・プラチナムは、下生えの草をそつとかき分け、なるべく音を立てないよう注意しながら、白き聖獣が棲むという神秘の森の中を進んでいた。

ふふくんだ。

このミアネージュさまをだしぬこうなんて、千年はやいんだから。

ミアネージュは、幼なじみの少年、レグルスの背中を目で追いながら、心の中でひとり密^{ひそ}かにつぶやいていた。

たった一人で、白き聖獣ファアーナの神殿をめざそうなんて、ぜえくったい生意気よ！

見かけはともかく、ほんととはわたしより十歳も年下のくせに、ちょっとばかり成長が早いからっていい気になっちゃってさ……。

それに何よ、そのカッコは！

もうすぐ夏だっというのに、偉そうにマントなんかしちゃって、ばっかみたい。ぜんっぜん、似合ってなんかないんだから！

心の中のつぶやきは、徐々にエスカレートしてゆき、悪態^{あくたい}とでもいうべきものへと変わりつつあった。

が、そのとき。

ぱきっ。

ミアネージュの足もとで乾いた音がした。

不注意にも枯れ枝^かを踏みつけ、思いのほか大きな音を立ててしまったことに驚いて、彼女が反射的に飛び退いた^と、その瞬間。

ひゅん。

えっ？

ミアネージュの耳がとらえた微かな音。

それは、まぎれもなく弓音のそれにちがいはなかった。空を切り裂き飛来した矢は、ミアネージュの頬をかすめるようにして、すぐ後ろの大木の幹に音を立てて突き刺さった。

「あうあうあう……」

あわてたミアネージュは手を真横に広げ、ばたばたと激しく動かして自己の存在をアピールした。レグルスの弓の腕は知っていたし、このままでは魔獣が何かの間違われたまま射殺されかねなかったからだ。

が、レグルスは、間をおかずに弓を引き絞り、二の矢を放ってきた。

コカツ！

「ひゃう!？」

二本目の矢はミアネージュの頭上すれすれを通過し、一本目の矢と同様背後の大木に、これでもかとはばかりに突き刺さった。

「ちっ、外したか……」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ わたしよ、わたし！」

ミアネージュが声を張り上げたのとほぼ同時に、レグルスの動きがぴたっと止まった。だが、レグルスにはミアネージュの姿が目に入っていない。少なくとも、ミアネージュにはそう思えた。レグルスの視線は彼女のいるあたりの空間をきよろきよろとさまよっているだけで、まるで彼女の存在に気づいた様子がないのだ。昏なお暗い森の中に、つかのまの静寂が白い霧のように広がっていった。

「ミア、だろ？ いいかげんに魔法を解いて姿を現さないと、ほんとうに射抜くぞ！」

「あ、いつけない……」

ミアネージュはレグルスに指摘され、ようやく姿隠しの魔法をかけたままだったことに気がついた。ペロツと舌をだし、マジックワンドを振って魔法解除する。

一瞬後。

流れるような淡い金色の髪に、瑠璃色の瞳。抜けるような白い肌。やや幼さは残るものの、ルージュを引いたような艶のある紅いくちびる。フレアーでミニのワンピースをすらっとした華奢な肢体にまとい、足もとは、シルキーホワイトのニーオーバーソックスにムートンのソフトブーツで、びしっと決めている。

そんな、見かけ十二歳くらいの美少女が、その場所に忽然と姿を現した。

「レグルス、ひどい！」

「ひどいって……。ミアがまぎらわしい真似するからだろ」

ブルークリスタルのついたマジックワンドをぱつと背中に隠し、ミアネージュはレグルスからあわてて視線をそらした。

「え、えーと……」

「ごまかしても無駄だぞ」

「べつに、ごまかしてなんか……」

「とにかく、今すぐまわれ右して帰れ！ いいな!!」

レグルスは、直径十メートルはあるつかという巨大な切り株の上に立ち、弓の先でミアネージュのほうを指しながら冷たく言い放った。

「か、帰れって……。いきなり何よっ！ レグルスひとりじゃ心配だから、わざわざついてきてあげたのに!!」

「……はつきり言って足手まといだ」

「そんなことないもん！」

ミアネージュが、ぷつつと頬をふくらませる。

「レグルス、魔法、使えないくせに」

「使えるさ」

「レグルスの使える魔法って攻撃魔法だけでしょ。治癒魔法は？」

「魔法薬がある」

「じゃあ、毒蛇とかに咬まれたらどうするつもり？」

「毒消しも持って来たさ、もちろん」

「毒消しって言ったって、この森にはエッグギターがいるんだよ。知ってるでしょ、あの蛇にはぷつぷつの毒消しが効かないってこと。魔法でしかなおせないんだからね」

「うっ……」

言葉につまるレグルス。

ミアネージュは、そんなレグルスを見て一気に攻勢にでた。

「激しいミュージーテーションを起こすことで知られているエッグギターの毒だけど、どうして毒消しが効かないか知ってる？」

「さあな」

あさつてのほうを向いて、いかにも興味なさそうに答える。

ミアネージュは、かまわずに先を続けた。

「あの蛇の毒はね、以前咬みついたことのある動物やヒトの遺伝情報を記憶していて、新たに咬みついた相手の遺伝子を書き換えてしまうんだって。つまり、毒そのものが、そのつど変化するから、血清をつくりだすことができないってわけ。わかった？」

「……………」

レグルスは完全にポーカーフェイスを決め込んでいる。

はたしてどこまで理解できたのか怪しいところだが、エッグギターの毒に、はげしいミューテーション作用があるということは一般常識だったし、とうぜんレグルスも知っているはずなので、それでよしとした。

「あの蛇に咬まれたばかりに、頭から角が生えてきちゃったり、容姿だけじゃなく性別までもが変化しちゃったりした人の話、レグルスだって聞いたことあるでしょ？」

「ふ、ふん……………」

「それに、つい最近、異界から墜ちてきた魔獣がこの森に棲みついたらってうわさもあるし、かんじんの神殿に行き着くまえに死んじゃうかもよ？ どう考えても、ひとりよりふたりのほうがいいって思うけどな」

ミアネージュのこの一言で、すべてが決まってしまった。

「ちっ、かつてにしろ！」

背中を向け、さっさと歩きだしてしまったレグルスの後を追いつ、ミアネージュはあわてて駆けだした。

「もう、すなおじゃないんだから！」

正午を少しまわった頃。

「ふうっ。それにしても歩きにくいわねえ……………」

木の根につまずかないよう注意しつつ、レグルスのすぐ後ろを歩いていたミアネージュの口から、そんなつぶやきがもれる。

レグルスが肩越しにちらつとミアネージュをふり返って、忠告してきた。

「魔法を使って飛んで帰るんなら、今のうちだからな」

「なにバカなこと言ってるの？ これだけ森の奥に入っちゃったら、無理に決まってるでしょ！」

森のほぼ中心にあるファーナの神殿に近づくにしたがって、張られている結界も徐々に強くなっていく。瞬間移動は森全域で封じられているのだが、飛行呪文もある程度森の中に入ると使えなくなってしまうのだ。

「あれ、もうそんなに歩いたっけ？」

「じゅうぶん歩いたじゃない。あれから三時間、休みなしで歩きどおし……」

そのとき、ミアネージュのお腹がくうつとかわいい音を立てて、主あいつのかわりに空腹を主張した。

「はあ、なんか思いつきりおなか減っちゃった。レグルス、そろそろお昼にしない？」

というミアネージュの提案により、ふたりは少し遅めの昼食を取ることにになった。

ミアネージュはマジックワンドを振って、それまで何もなかった空間に、木製のテーブルと椅子いすを二脚、そしてバスケットを一つ出現させた。

胸につけている翠色みどりをした魔法石の中に異空間をつくりだし、そこに魔法で封じ込めておいたものを取りだしただけ。なのだが、何も知らない異世界の住人がその様子を見ていたら、まさに奇跡と映ったかもしれない。

レグルスも、実は同じような働きをする魔法の腕輪を持つてはいる。が、中に入っているのは、何種類かの武器と魔法薬、そして干し肉や乾パンなどの携帯食のみだった。

ミアネージュはさっそく、バスケットの中からまだほかほかと湯気の出ているスープやフライドチキン、サンドイッチなどを取りだし、テーブルの上にならべはじめた。

「レグルスは携帯食？」

干し肉をかじっているレグルスに、ちらつと視線を投げかけ、わざとらしく尋ねる。本当は、レグルスの分もつくってきたのだが、少しだけいじわるしてみたくなったのだ。

「ぐっ……。い、いいだろ、べつに！」

「くすっ」

「おまえ、いつのまに時間操作系の魔法なんておぼえたんだ？」

ミアネージュはスープの入ったやや大きめのカップを両の掌で包み込むようにして持ち、レグルスの質問を無視してにっこりと微笑を返した。

「ちっ、やなやつ！」

ミアネージュは肩をすくめ、テーブルの上にスープの入ったカップをそつと置き、言った。

「レグルスもおぼえたら？ けっこう便利だよ、タイムフリーズ時間凍結って魔法。できたてのお料理にかけておけば、こんなふうにも温かいスープが飲めるし、お魚やお肉なんかにかけておけば、半永久的に新鮮さを保つことができるしね。なんなら教えてあげよっか？」

今度はレグルスがミアネージュを無視する番だった。かたそうな干し肉を歯で噛みちぎり、そっぽを向いたまま、もごもごと口を動かしている。

さすがにちよつとやりすぎたかな？ そう思ったミアネージュは、急いでレグルスの前にもうひとつバスケットを出現させた。

「もうっ、そんなむすつとした顔、しないでよ。ほら、ちゃ〜んとレグルスの分だってつくってきてあげたんだから」

「……………」
おいしそうな匂いの漂ってくるバスケットを目の前に、レグルスがしばし固まる。

「ミア、意地がわるすぎるぞ！」

「レグルスだって、いきなり矢を射かけたりして、さんざんわたしのことおどかしたんだもん、これでおあいこ、ねっ？」

「……………ちえっ」

食欲には勝てず、おとなしく引き下がるしかないレグルスであった。

小鳥たちの囁きもいつのまにか止んでしまい、森は静謐につつまれていた。

思わず午睡に誘われてしまいそうなほど、静かでゆったりとした時の流れの中。ミアネージュはティーカップを片手に、レグルスを小鳥でも観察するかのようにながめていた。

ミアネージュにじっと見つめられ、その観察対象になっているレグルスは今の食後のデザートに出されたチョコレートワッフルを口いっぱいにはおぼっているところだ。

くすっ。

レグルスったら、いつもながらすごい食べっぷり。

でも、こんなふうに、ふたりつきりでゆっくりお昼を楽しめるような機会なんて、いままであんまりなかったもの。

やっぱり、ついてきてよかったな。

レグルスは思いつきり否定するかもしれないけど、なんかデートしてるみたいで楽しいし……。

「ねえ、レグルス？」

「ん？」

最後のひとつを口の中に押し込もうとしていたレグルスが、ミアネージュの呼びかけに動きをとめて視線を上げる。

目と目があった。

瞬間、レグルスの顔がふつと曇った。

おそらく、ミアネージュの瑠璃色の瞳に、いたずらっぽい輝きが宿っているのを見つけたしたせいだろう。

「なんだよ」

あからさまに警戒の色を見せながら、ぶっきらぼうに訊いてくる。

ミアネージュは少しもあわてることなく、レグルスのブルーグレーの瞳から、さらさらとした銀色の髪に視線を移し、なにげなくといった感じでたずねた。

「うん、レグルス、髪を伸ばしたらどんな感じかなあって思って……」

「いきなり、何を言いますかと思えば……」

レグルスの言葉を途中でさえぎるように、ミアネージュが質問する。

「子供の頃はのばしてたよね。なんで切っちゃったの？」

「……いいだろう、べつに！」

「やっぱり、女の口にまちがわれたりするから？」

「わかってたら聞くな！」

「似合うと思うけどな」

「似合う、似合わないの問題じゃない！」

「くすっ」

「笑うな！」

「レグルス、鼻の頭にチョコついてるよ」

「ふん、そんな手に引つかかるもんか！」

ミアネージュは、黙ってティーカップをテーブルの上に置き、身を乗りだしてレグルスの鼻の頭を指先でちよんとぬぐった。

「ほらっ、ね？」

「……………」

薬指の先端についたチョコレートをぺろつとなめとって、ミアネージュはウィンクしてみた。

「ちよっぴりレグルスの味がするかな？」

「ば、ばか！ そ、そういうことするか、ふっつう？」

「いいじゃない。今、この森には、わたしとレグルスのふたりつきりしかいないんだから。そんなに恥ずかしがる必要なんて、ないでしょ？」

レグルスが顔を真っ赤にして視線をそらす。なれないシチュエーションに困惑しているのだ。ミアネージュは、そんなレグルスを瞳を細めて見つめ、微笑んだ。

「レグルス、純情なところは相変わらずね」

「ちっ、そうやっていつまでも子供扱いしてればいいだろ！」

「うん」

「くそっ！ いつか絶対泣かしてやるからな、おぼえてるよ！」

「いつか、なんて言わずに、今、泣かせてみてほしいな」

「い、いまはしょくじちゅうだ」

「レグルス、セリフが魔操人形みたいで変だよ？」

ミアネージュのくすくす笑いを聞きながら、レグルスが舌打ちする。

実年齢では、ミアネージュのほうがレグルスより十歳ほど年上ということもあって、ミアネージュの精神的優位は、当分ゆらぎそうにもなかった。

ふたりの間の妙な雰囲気も解け、二杯目の紅茶を飲みながらくつろいでいるときだった。

ティーカップをくちもとにもっていったまま、ふと、レグルスの動きが止まった。

十秒。十五秒。二十秒……。

呼吸さえ止めたまま、レグルスは動こうとしない。

ミアネージユは、訝しそうにレグルスの顔をのぞき込んだ。

「レグルス、どうかしたの？」

「しっ！」

「えっ？」

「困まれている……」

「ザザッ……」

頭上で微かに葉擦れの音がした。

と同時に、レグルスの掌中にあつたティーカップが消え、かわりに片刃の小刀、フォルシオンが現れた。

次の瞬間。

樹上から黒い影が矢のように降ってきた。

「ギンッ！」

振り仰ぎつつ鞘を払い、敵の振り下ろした蛮刀を受け止める。

完全な不意打ちだったにもかかわらず、まったく動じることなく、そのまま相手の腹に蹴りを叩き込む。

相手は二度三度と地の上を転がり、体勢を整えようと後方に飛び退いた。

しかし、レグルスは追撃の手をゆるめず、呪文を唱え、もっとも得意としている火炎系の魔法を放った。

「爆裂火球弾ッ！」

が、白く輝く光球が、敵を捉えようとしたその瞬間。

「魔法消去ッ！」

ミアネージユの唱えた呪文により、レグルスの放った攻撃魔法は、一瞬にして消滅させられていた。

「なっ、ミア!？」

「レグルスのばかり！ 森の中で火炎系の魔法を使ったらどうなるかってことぐらい、わからないの！」

「つと、そう言われてみればそうか……」

敵の動きを目で牽制しつつ剣を構えなおし、背中のミアネージュに答えを返す。

「それはそうと、レグルス、あれ、いったい何なの？」

「……さあ？」

「もしかして、あれが異界から墜ちてきたっていう、例の魔獣？」

「……それは、どうかわからないけど、友好的な雰囲気はまったく感じられないな」

いかにも皮肉っぽい口調でレグルスが言う。

ミアネージュはレグルスの背中に隠れ、顔だけだしてつかのま獣人を観察したあと、まるで緊張感のない感想をさらっと述べた。

「でも、見かけはけっこうかわいいんじゃない？」

レグルスはあやうくその場にへたり込みそうになり、声を荒らげた。

「どこがかわいいんだ、どこが！」

あるいはレグルスの怒声を誰何の声と勘違いしたのか、そのときふいに森がざわめき、それまで樹幹や茂みの陰に隠れていた者たちが、いつせいに姿を現した。それは、何もかもが異質な感じのする異形の者たちだった。

身長はまだ成長途中のレグルスとほぼ同程度で、一七〇前後といったところ。細身でやや撫で肩。全身が茶褐色の獣毛に覆われていて、衣服は身につけていない。

人間とは、明らかに進化の系統樹が違う。

イタチ科の獣が、まったく人類の存在しない惑星で適応放散した結果生まれた獣人、そんな形容がぴったりとくる姿形をしていた。

「話し合いたくても、言葉はちよっと通じそうにないし、やっぱり戦闘は避けられないかな……」

ミアネージュは、とりあえずテーブルや椅子など、戦闘時の邪魔になりそうなものを魔法石の中に仕舞い込み、かわりにマジックワンドを取りだして気持ちを引き締めた。

レグルスとミアネージュの二人を取り囲むように、獣人たちの放つ殺気が渦を巻きはじめ、一気に膨れ上がっていく。

「くるぞ！」

言って、レグルスが一步前にでた瞬間、四方から無数のハンドアックスが弧を描いて飛んできた。

ミアネージュがとっさに魔法障壁を張って防御する。

「ミア、魔法付与してくれ。一気に片を付けてやる！」

「待って、レグルス。まともやり合うことなんてないわ！ わたしが何とかしてみるから……」

「何とかって、どうするつもりだよ？」

ミアネージュは答えるかわりにマジックワンドを顔の前で水平に構え、すうつと目を細めて催眠系魔法の鍵となるキーワードを口にした。

「夢幻魔睡」

たちまち、あたり一帯に薔薇の香りをともなった白い霧がたちこめた。

ほとんど間をおかず、獣人たちがばたばたと倒れていく。

「夢幻魔睡、広範囲の敵を一度に眠らせることができる強制睡眠魔法か……」

「レグルス、つられて寝ないですよ？」

「寝るか！」

むろん、レグルスはミアネージュの作りだした結界内に立っているので、夢幻魔睡の影響を受けることはなかったのだが。

レグルスの手をとって駆けだしながら、ミアネージュが言う。

「あれが何なのか、ちょっと気になるところだけど、とりあえずは先に進まなくっちゃね。なにしろ、この森の中にいるかぎり瞬間移動はできないわけだし、逃げるが勝ちって、よくいうじゃない？」

「この場合はしょうがないか……」

夢幻魔睡の効果範囲から完全に抜け出したところで、ふたりはいったん立ち止まり、後ろをふり返った。

ほつと息をつき、ミアネージュは胸をなで下ろした。

「追いかけて来なかったところを見ると、全員ねむっちゃったみたいね」

「でも、ないみたいだぜ」

レグルスは厳しい表情のままそう言うと、いきなりミアネージュを突き飛ばした。まさにその瞬間、銀色の閃きがミアネージュの鼻先をかすめた。

「え？」

はじめ、ミアネージュはどこか遠くのほうから弓か何かで攻撃されたのだと思
った。

が、すぐに自身の間違いに気がついた。

「姿は見えないけどすぐそばに何かいる！ まさか、幻^{げん}魔^ま法^{ほう}!？」

しりもちをついたまま、ミアネージュが驚きの声を上げたそのとき、レグルス
が動いた。

横^{よこ}様^{さま}に倒れ込みながら虚^{こくう}空^{くう}を剣^{いっせん}で一閃^{せん}する。

ザシュツ！

何もない空中から血しぶきが上がった。

「ミア、何をしている!? とつとと強制魔法解除しろ！」

「あ、うんっ！」

レグルスの言葉でわれに返ったミアネージュは、パツと立ち上がってワンドを
一振りした。

瞬間、デイスペルマジックが発動し、あたりの空間がゆらめいた。

そして。

腰まで届くほど長い緋^ひ色の髪。鮮やかなエメラルドグリーンの瞳。躰^たのライン
を誇^こ示^じするかのような黒いボディスーツ。

魔法解除され姿を現したのは、意外にも額に第三の眼を持つ魔族の少女だった。
右手にダガーを握りしめたまま顔をしかめ、もう片方の手で脇^{わき}腹^{はら}を押さえている。

レグルスの剣により、かなりの深^{ふか}手^てを負ったようで、立っているのがやっとと
いった感じだった。

「なっ、まさか……」

「魔族!？」

レグルスとミアネージュのふたりが、同時に声を上げた。

「くっ、あと少しだったのに……」

少女の紅^{こう}唇^{しん}がくやしそうに歪^{ゆが}む。

「うわさには聞いてたけど、ほんとに目が三つあるんだ」

一応、危機を脱したせい、緊張の解^とけたレグルスの口から、初めて魔族を目
にした率直な感想がもれる。

しかし、ミアネージュはレグルスの言葉を聞きとがめ、たった今、その魔族の少女に殺されかけたことも忘れて説明しはじめた。

「バカね、レグルス。あれは目なんかじゃないの！ 潜在的な魔法力を極限まで引き出すため、脳内にわざと寄生させた高次元生命体の感覚器官なのよ」

「感覚器官？ ってことは、やっぱり目って言ってもいいんじゃないか？」

「うっ……」

レグルスにすかさず切り返され、ミアネージュは思わず言葉につまった。

「まっ、いいや。そんなことより、どうして魔族がこんなところにいるんだ？」

「……そう言えば、そうね」

気を取りなおし、ミアネージュは魔族の少女に向きなおった。

おもむろに口をひらき、ややきつめの口調で詰問する。

「あなたはこうしてここに居るの？ わたしたちを襲った目的はなに？ いにしえに交わした契約によれば、わたしたちフェアイリスの住む世界に魔族は存在してはならず、あなたたち魔族の住む世界に、わたしたちフェアイリスは存在してはならない。ってことになってたはずだけど？」

しかし、魔族の少女に答えはなかった。じつところこの隙を窺ってるようにも見える。

ミアネージュは、少し声の調子を抑え、攻めかたを変えてみた。

「傷が痛むんなら、なおしてあげてもいいわよ？ ただし、そのダガーを捨てて降参するって約束してくれればだけ……」

苦痛のためか、あるいは失血によるものなのか、少女の顔からは血の気が失せ、青ざめて見えた。しかし、それでもなお、氷のように冷たく鋭いまなざしでミアネージュを睨みつけている。

「……馬鹿にするな！ これしきの傷、自分で治せる！」

「そうよね、幻穩魔法を使えるんだもの、治癒魔法ぐらい使えて当然よね。でも、降参しないっていうんなら……」

ミアネージュは、マジックワンドを構えて言葉を継いだ。

「容赦しないから！」

「くっ……」

そのとき。

ふと、少女の視線が、ミアネージュの手に行っているワンドを捉えて静止した。碧の瞳が驚きに大きく見開かれる。

「青き鳳凰の水晶!? まさか、そのワンドは……」

「あら、これがなんだかわかるの?」

「……………」

青き鳳凰の水晶は、ひとつの世界に鳳と凰のふたつしか存在しないきわめてレアな魔法石である。

ごく普通の魔法石は、力をすべて解放すれば、もう二度と使えなくなってしまうが、青き鳳凰の水晶は違う。しばらくほうつておけば、大気中に遍在するマナを自動的に吸収し、その力を復活させることができるのだ。

「これはね、ひよんなことから冥竜王の王妃様にもらったとっても貴重なマジックアイテムなの。かなりの高レベル魔法まで、呪文の詠唱なしに発動させることができるのよ。禁呪とされているような、破壊力の大きい攻撃魔法は、さすがにちよつと無理だけど……………」

「呪文の詠唱なしに……魔法を……………」

「そうよ。すこしは驚いてくれた?」

「……………」

魔法力にかんして言えば、フェアイリスと魔族の間に優劣はない。また、高レベルの魔法になるほど、唱えねばならない呪文も長くなる。となれば、呪文詠唱によるタイムラグなしで魔法を使えるミアネージュの側に、絶対的なアドバンテージがあることは明らかだった。

自身の不利を認識したのだろう、少女の瞳からは、もはや挑戦的な光が完全に消えさっていた。

「さあ、どうする? あなたの魔力がどんなに高くても、わたしにはこのワンドがあるし、剣技に長けたレグルスもいる。二対一じゃ勝負にならないと思うけど?」

「ちくしよつ……………」

少女の呟きとともに、その細い指先からダガーがすべり落ちた。

ミアネージュは、胸の魔法石の中から一組の腕輪を取り出した。

魔導士にとっては最凶とも言える魔法封じの腕輪、水晶環である。

それが何かということが、少女にもわかったのだらう。その顔に、怯えにも似た表情が走る。

「ごめんね。ほんとはこんなことしたくないんだけど……」

ミアネージュはまつげを伏せ、少女の手首に魔法封じの腕輪をはめた。瞬間、少女のからだを白い光がつつみ込み、魔法は発動した。

とくに苦痛などは感じないはずだったが、少女は力つきたようにかくんと膝を折り、意識を失ってそのまま前のめりに倒れ込んでしまった。

「まってて、いますぐなおしてあげるから」

ミアネージュはあわててそう言い、少女を仰向けにすると、治癒魔法で脇腹の傷を癒しはじめた。

「名前は？」

テーブルの対面にすわった魔族の少女をじっと見つめながら、レグルスがたずねた。

少女は、ミアネージュがふるまつた紅茶をひとくちすすってから、静かに口をひらいた。

「……ロゼファイヌ」

「あら、素敵な名前ね」

ミアネージュの言葉をたんなる社交辞令と思ったのか、ロゼの表情にはまったく変化が見られなかった。テーブルの上に視線を落としたまま、ティーカップを両手でもてあそんでいる。

ミアネージュはかまわずに先を続けた。

「じゃあ、ロゼ。わたしからふたつめの質問。あなたは、なぜこの世界に来

たの？」

一呼吸おいてから、ロゼは答えた。

「姉様の為だ……」

「ねえさま？」

聞き返したミアネージュに、ロゼはそれ以上なにも言おうとはしなかった。

「三番目の質問だ」

レグルスが訊く。

「あの獣人たちはおまえが召喚したのか？」

ロゼはわずかに顎を引き、肯定の意を示した。

レグルスがさらに質問を重ねる。

「何故おれたちの命を狙った？」

「指令を受けたからだ」

「指令？」

「そうだ。ファーナの神殿に仕えている巫女たちを一人残らず殺せ、と」

「！」

ロゼの答えを耳にしたミアネージュは、相手に気取られないよう精神感應相交感（スピリチュアルインセンステイス）いわゆる思念波でその意思をレグルスに伝えた。

「あの娘、どうやらわたしのことをファーナの神殿の巫女と勘違いしてるみたいね」

「……で、どうするつもりなんだ？」

ミアネージュにならない、レグルスも思念波で応じる。

「このまま誤解をとかないで、もう少しなにか聞きだそうと思っただけど……、あわせてくれる？」

「わかった」

レグルスが思念波を返すと同時に、こくと大きくうなずいた。

「……」

もはやフォローのしようもなく、ミアネージュは心の中でがつくりと肩を落とした。

「レグルスのほか！ うなずいてどうすんのよ、うなずいて！ 思念波で会話してたの、ばればれじゃない！」

「あ……」

ミアネージュに指摘され、レグルスはようやく自身の失態に気がついた。

「わるい。でも、話の内容まではわからなかったはずだろ？ 勘弁してくれ」

「もう、しょうがないわね」

ミアネージュは小さくため息をつく、ぱっと気持ちを切りかえ、いよいよ質問の核心に迫った。

「なぜわたしを……、ううん、ファーナの神殿に仕えるものたちを、殺さなければならぬの？ その目的はなに？」

「……………」

ロゼは、答えることそのものを拒否しているかのように、ぎゅっとくちびるを引き結び、三つの目をかたく閉じている。

それでもミアネージュはロゼの答えを待った。

時だけが静かに流れていく。

長い沈黙のあと、ロゼがようやく口をひらいた。

「交換条件だ。その質問に答えるかわりに、この腕輪を外し……………」

だが、そのとき。

ロゼの装身具 その首を飾っていた白銀の首輪が、突然まばゆいばかりの光を放ちはじめ、魔法封じの腕輪、水晶環が粉々に砕け散った。

「なっ……………」

ミアネージュは目を大きく見開き、絶句した。

が、驚くのはまだ早かった。

白く輝く首輪に、漆黒の文字が次々と浮き上がり、呪文のスペルを完成させていく。

「姉様、まさかあたしに……………呪限魔法を？」

苦しそうにつぶやいたロゼのからだに、ふわっと宙に浮き上がった。

ミアネージュは、首輪の円周に沿って走っていく文字を読みとり、叫んだ。

「極大呪文だわ！」

「なんだって!？」

滅多なことでは動じないレグルスが、思わず驚きの声を上げ、拳措を止める。

「なんとかディスプレイできないか試してみるから、レグルスは下がって！」

言うなり、ミアネージュは急いでワンドを構え、精神を集中しはじめた。

しかし。

アイテムを作った者の魔法力が、ミアネージュのそれをはるかに上まわっていたため、魔法解除は失敗に終わってしまった。

「くっ、だめ……………。魔法力が桁ちがい。くやしいけど、とてもわたしの手には負えないわ」

極大呪文は、どのような系統のものであれ、都市のひとつやふたつ一瞬のうちに消し去ってしまえるほどの力を持っている。もし、呪文が完成し魔法が発動すれば、今ここにいる三人のみならず、ファーナの神殿もろとも巨樹の森そのものが消滅してしまうだろう。

「何とか外せないのか？」

「だめなの。あの首輪には、どこにも継ぎ目がないのよ。たぶん、魔法を使って身につけたんだらうけど……」

レグルスの問いに、ミアネージュは絶望的な気分で答えた。

「今は、首輪自体が魔力を放出していて、その手の魔法を受けつけなくなってるの。それに、もし首輪を外すことができたとしても、魔法の発動を止める手段がなければ、結果は変わらないわ」

「……………」

「絶対魔法遮断結界を張れば、たぶんなんとかなると思う。けど……」

ミアネージュはあえてロゼのことは考えないようにして、そう言った。

瞬間移動が封じられているいま、ふたりにできることは、魔法の発動地点から極力はなれ、絶対魔法遮断結界を張って、災厄をやり過ごすことのみはずだった。

「レグルス、走って!」

意を決し、レグルスの腕をとって駆けだそうとしたミアネージュだったが、そのレグルスに思いつきり手を振り払われ。

「レグルス!」

「待てよ、あの娘はどうなるんだ？ 見捨てる気か？」

「だって……。じゃ、どうしろって言うのよ！ このままじゃ、わたしたちまで巻き添えに……」

焦燥感（じょうそう）にかられ、ミアネージュが思わず声を尖（とが）らせる。呪文は、もはや最後のワンセンテンスにかかっている。

「たしか、マジックアイテムってのは、破壊されればその効力を失うはずだったよな？」

「レグルス、まさか……」

「ミア、テーブルを片付けて下がっている!」

レグルスは早口に言い、剣を鞘さやに収めたまま腰のあたりに構かまえて居い合あいの型を取った。

「ロゼ、死にたくなかったら動くなよ！」

もはや、生への執着をまったく無くしてしまったのか、ロゼはうつろな視線を虚空こくうに向けたまま、何の反応も示さない。

間合まあいをはかったのち、すつと目を閉じ、心眼しんがんでロゼの姿を捉とらえる。

極大呪文が完成し、首輪がひとときわ強く輝きだしたのと、レグルスが剣を抜いたのは、ほぼ同時だった。

真っ白い光の束たばが、幾重にもわたって首輪から放出され、あたりを覆おおいつくしていく。

刹那せつな。

キンツッ！

甲高かんだかい金属音が響き、首輪が地に落ちた。

一瞬遅れて、ロゼのからだが呪縛じゆばくから解放され、投げだされる。

そのロゼを左腕で抱きとめ、レグルスは大きく息をついた。

数秒の間まをおき、ミアネージュがその場にへなへなとすわりこんだ。

「はふう。レグルスの腕は信じてたけど、さすがに心臓がおかしくなりそうだったわ」

レグルスは、気を失ってしまったロゼを地面に横たえ、剣を鞘に収めてふり返った。

「結果オーライってことで、ゆるしてくれ」

「ううん、わたしは自分が助かることだけしか考えてなかったのに、レグルスはちがったもの。その娘こだけじゃなく、この森の樹々やここで暮らしてるすべての動物たち。ファーナの神殿……。みんなレグルスが守ったんだよ」

「お、おれは、べつに……」

ミアネージュの言葉は、レグルスにとって思いもかけないものだったらしい。照れのため、顔を赤くして、あわてて話題を逸そらそうとする。

「そ、そんなことより、彼女、呪限魔法じゆげんがどうのって言うてただろ。あれって、どういう意味なんだ？」

「……………」

つかのまの沈黙のあと、ミアネージュは、視線をレグルスからロゼに、そして、苔むした地面に落ちている銀の首輪へと移し、答えはじめた。

「そこに術者がいなくても、ある条件を満たしたことが鍵となつて発動するような魔法を、呪限魔法っていうの。使い方としては、護身用として、装飾品みたいな、いつも身につけているものにかけておくのが一般的かな」
まっげを伏せ、ことばを選んで先をつづける。

「きつと、あの首輪には、秘密をもらそうとしたとたん極大呪文が発動するよな、ある意味、呪いっぽい魔法がかけられていたんだと思う。彼女の知らないあいだにね……」

「……そういうことか」

拳を握りしめ、レグルスが低い声でつぶやいた。

そのとき。

「いやああああああっ！」

聞こえてきたのは、女性の悲鳴である。が、声はかなり遠く、ミアネージュたちのいる場所からは、やや距離があるように感じられた。

敏感に異変を察知した鳥たちが、鳴き叫びながらいつせいに空へと舞い上がった。

その直後。

悲鳴があつたとおぼしき場所から、天を衝くような炎の柱が立ちのぼった。

大地を揺るがす爆発音が続けざまに起こり、荒れ狂う炎が、あたりの樹々を呑み込んでいく。

「なんだ!？」

「もしかしたら、ロゼ以外にもこの世界に来てる魔族がいたのかも」

「ってことは、今の悲鳴はファーナの神殿の巫女……」

レグルスが、言葉途中で走りだす。

ミアネージュはワンドを振って、気を失っているロゼに防御結界を張り、すぐにレグルスの後を追った。

「レグルス待って、炎を消すのが先よ!」

頭上から降ってくる火の粉を手で払いながらミアネージュは駆けた。進めば進むほど、熱と煙が増してくる。

かざした掌のあいだから炎熱にかすむ前方の樹間を透かし見たそのとき、ミア
ネージユの瞳を真紅の閃光が射た。

えっ？

そう思った瞬間。

炎の柱が上がったあたりの空間に、天のすべてを覆いつくすほどの光球が生ま
れ、轟音とともに大地に激震が走った。

「きゃっ！」

地の底から突き上げてくるような縦揺れに、もはや両の足で立っていることさ
えままならなくなり、その場に膝をつく。

だが、レグルスは巧みにバランスをとって走りつづけ、先行している。

「あ、レグルス待つて、行っちゃだめ！ レグルスつてばーっ！！」

なんとかレグルスを止めようと、ミアネージユは声を限りに叫んだ。

しかし、レグルスは呼びかけに応えることなく、炎の壁の中へと突っ込んでい
った。